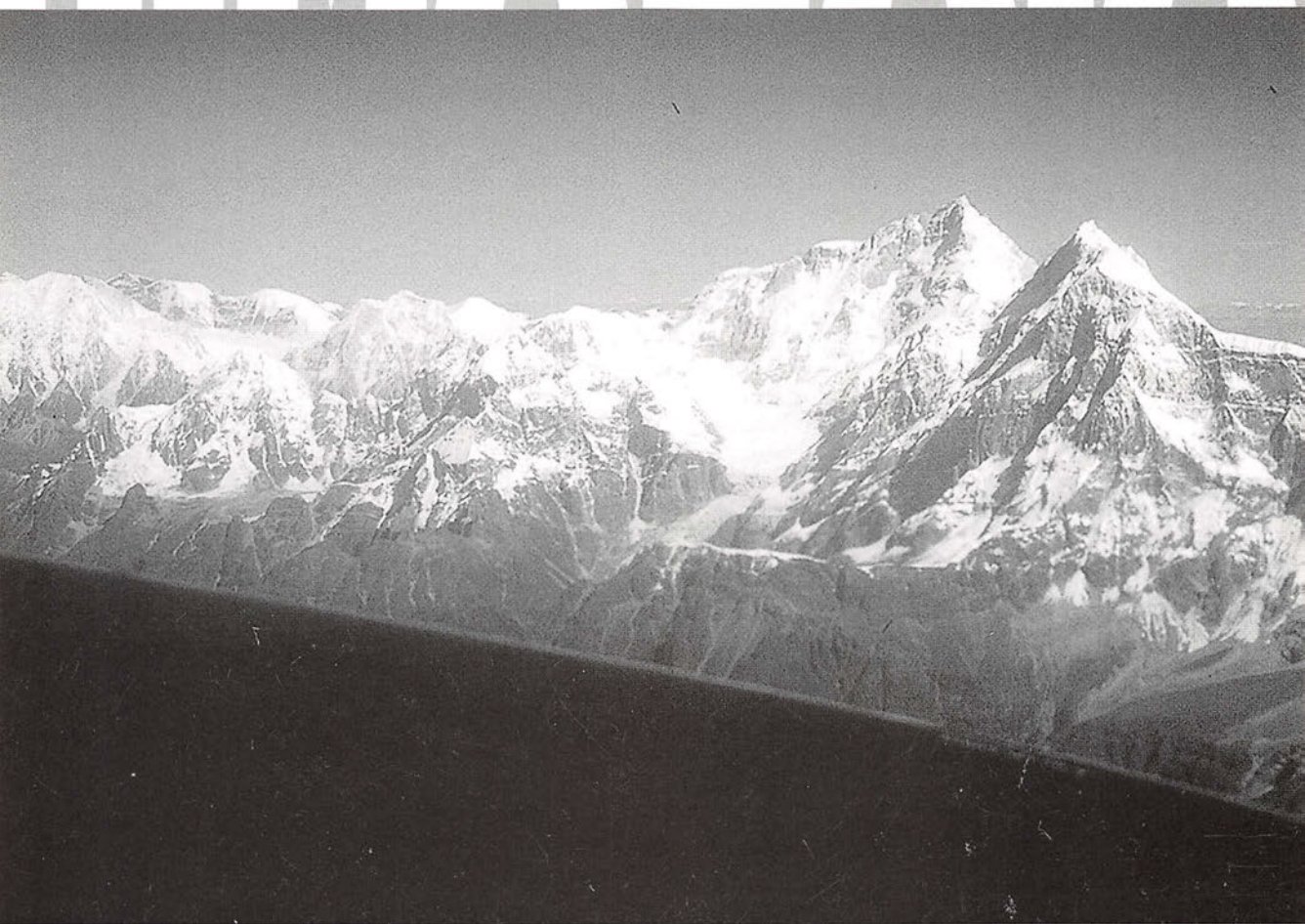


ヒマラヤ

No.395



2004 OCT



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2005年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2005年7月15日(金)～8月22日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シジャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2005年7月23日～8月28日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。

表紙写真

2003年10月、野沢井歩の遭難したヒムルン・ヒマール(7,126m)の姿を求めて飛ぶと、P29(ガディ・チュリ 7,871m、1970年大阪大学)とマナスル(8,163m、1956年JAC)が右に大きく見え、左端に三角形のネムジュン(7,139m、1983年弘前大学)、その後にラトナ・チュリ(7,035m、1996年信州大学)が頭を出していた。全て日本人が初登頂した山々である。
(文・写真：岩崎 洋)

ヒマラヤ No. 395

1. PEOPLE 名塚 秀二

3. K2 50周年祝賀、ナンガ・パルバット51周年記念行事に参加して 中村 保

6. アルカ・ターゲ Camel Expedition ウィリアム・ホルゲート(太田康夫 訳)

16. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉

18. マナスル入山者[1952-2002=51年間]

23. [連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑(10)

24. 事務局日誌

今秋、愛知県山岳連盟隊に参加して、アンナプルナ I (8,091m) の登頂を目指す。登頂に成功すれば世界に14座ある八千メートル峰の十座登頂となり、日本人としてはこれまで九座でトップに君臨していた先輩山田昇の記録を抜くことになり、14座登頂への弾みとなる。

福岡県田川郡生れだが、1歳の時に群馬県前橋市に移転した。農大二高時代は陸上部に所属。登山を始めたのは社会人となり前橋日産モーターに入ってから。尾瀬や谷川岳を登ってのめり込み、前橋山岳会に入会。

名塚のこれまでのヒマラヤ登山を紹介する。

1981年秋、前橋山岳会隊の一員としてインド、ガルワール・ヒマラヤのスワロガルヒニ(6,252m)登山に参加してヒマラヤ登山デビューしたが、この時は情報の少ない山と岩壁帯に阻まれて登頂は成らなかった。これ以後は全て八千メートル峰に挑戦している。

84年冬、群馬県山岳連盟がアンナプルナ I の南壁冬期初登攀を目指した隊に参加。登山隊はエースの山田が落石を受け、大量の降雪もあり結局、12月29日に松永幸雄と名塚が到達した7,200m地点が最高到達点となった。

85年秋、八木原罔明が隊長となって組織された「植村直己物語撮影隊」に参加して、西田敏行らをサポート。最後の植村の登頂シーンを撮影するチームとして10月30日、サガルマータ [エヴェレスト] (8,848m) の登頂に成功。ヒマラヤの初めての山頂が世界最高峰という幸運に恵まれた。

87年冬、84年の雪辱を目指す群馬隊に参加し、アンナプルナ I 南壁に入る。名塚は12月18日、C 4 (7,400m) 上のルート工作を行ったが、翌日不調となりここが彼の最高到達点となった。隊は大雪山崩の発生によって甚大な被害を受けながらも、12月20日に山田、斎藤安平、三枝照雄、小林俊之が南壁冬期初登攀に成功した。しかし、登頂後、C 4 へ向けて下山中、小林、斎藤が相次いで滑落行方不明となる惨事となった。



89年秋、ヒマラヤ同人隊の一員として妻の好子と共にマナスル(8,163m)に入山。雨と雪に悩まされ、風も強まり10月17日、7,400mで登頂を断念。

90年夏、マナスルの時の隊長であった福島正明に誘われて横浜市山岳協会の世界第二位の高峰チョゴリ [K 2] (8,611m) に登攀リーダーとして挑戦。C 1 が雪崩に襲われサダーが重傷を負うという事故を乗り越えて、北西壁に新ルートを拓き、上部は北面の日山協ルートを登り、8月9日、名塚と今村裕隆が初登攀に成功した。

91年春、H A J と I T B P (インド・チベット国境警察) が合同でシッキム側から世界第三位のカンチェンジュンガ(8,586m)に挑戦する隊に副隊長として参加。ルートは、戦前のドイツ隊の挑戦で有名な北東支稜にとられた。名塚に「参加した登山で最も困難」と言わしめたルートは、巨大で不安定な雪塊、雪塔が連続する。アタックに出たインド隊の事故死などを乗り越えて5月24日、名塚は今村、小田隆三と登頂に成功した。

91年冬、群馬岳連が冬期アンナプルナ南壁の次の目標としたのが、サガルマータ南西壁の冬期初登攀であった。その隊に登攀隊長として参加。春のH A J カンチェンジュンガはそのための前哨戦と位置付けられていた。現代に残された最高峰の最高に困難な南西壁を冬に完登する試みは、烈風の咆哮と落石に悩まされた。それでも登山期間の延長を申請し2月9日まで頑張ったが、1月8日、

▼カンチェンジュンガ北東支稜（1991年春）



名塚と佐藤光由が宿泊したC 5 (8,350m)が最高到達点となった。

93年秋、群馬隊はこの冬、再びサガルマータに向かうことになった。その高所順応を秋にチョー・オユー(8,201m)で行うことになった。本番のために積極的に酸素を使用した。10月8日、名塚は尾形好雄、秋山剛、佐藤、後藤文明、星野龍史と通常ルートから登頂し冬の準備を終えた。

93年冬、サガルマータ南西壁の雪辱戦である。ネパールの登山規則のため、対ネパールの隊長は名塚となる。八木原隊長と住吉仙也医師はトレッキング隊としてBCに入り指揮をとる。前回の経験と事前のチョー・オユーでの高所順応が効を奏し、名塚は後藤と12月18日冬期南西壁初登攀に成功した。20日には田辺治、江塚進介、22日には尾形、星野も登頂し、群馬隊の悲願は達成された。

97年夏、群馬岳連がカラコルムのガッシャーブルムⅠ(8,068m)、同Ⅱ(8,035m)、ブロード・ピーク(8,051m)の三つの八千メートル峰を舞台に、隊を三つに分けてそれぞれ二つずつ登頂することを目標に派遣した登山隊の隊長としてA隊を率いた。名塚は先ず7月7日、星野らとⅠ峰に登頂すると14日にはⅡ峰にも登頂し登山を終えた。

99年秋、群馬岳連のシシャパンマ(8,027m)から冬のマナスルを連続して登頂する隊の隊長として先ずシシャパンマに挑戦。シェルパを使用せず、

大雪に悩まされたが、10月29日、星野、品川幸彦、福本誠志、剣持典之と主峰の登頂に成功した。シシャパンマはほとんどの隊が中央峰に登頂しており、日本で主峰に登頂したのは、81年田部井淳子、88年山田昇、三枝照雄、山本篤に次ぐものである。

99年冬、引き続いて冬期マナスルに挑戦したが、天候が味方せず7,000mで登頂を断念した。

2000年夏、所属する前橋山岳会の隊長として、ブロード・ピーク主峰に挑戦し、悪天候に悩まされながらも、7月29日単独で登頂に成功した。

01年秋、東壁をアルパイン・スタイルで登攀する群馬ミヤマ山岳会隊に参加し、北東稜からの登頂を目指した。名塚は10月11日登頂に成功したが、東壁に向かった星野、品川、福本の三名は行方不明と成った。名塚もこの時、手の指に凍傷を負い、この後、高所登山の休養を余儀なくされ、今回のアンナプルナが復帰第一戦となる。

以上のように名塚の八千メートル登頂は、最高峰は、金字塔の南西壁冬期初登攀を含めて二度登頂。第二位のK 2は、北西壁下部初登攀。第三位のカンチェンジュンガは、入山が困難なシッキムでルートは不安定で困難極まる東北支稜。シシャパンマは主峰。カラコルムではGⅠ&GⅡの2週間の連続登頂など、山田の内容には及ばないまでも、14座登頂を目指すには十分な内容と言える。

山田は、九座目のチョー・オユーを登った後、「あと五つ。行く前は、二つ登れば少しは近くなるかな、と考えていた14座完登が、登ってみるとさらに高く、遠くなったように実感した」と吐露し、その通りとなった。

名塚も今はそのことをひしひしと感じている。先日、の激励会で朝日新聞記者の質問に答えて「今回凍傷の影響がなければ一気に14座登頂を目指したい(2004. 8. 7朝日新聞・夕刊)」と答えているが、年齢も年齢なのであわてずにじっくりとしたペースで14座を完登してもらいたいものだ。

名塚秀二(なづかひでじ) 1954. 11. 19生れ。

前橋山岳会会員、群馬県山岳連盟理事長、日本ヒマラヤ協会常務理事。前橋市内で好子夫人と二人暮し。

K 2 50 周年 祝 賀 ナンガ・パルバット51周年

記念行事に参加して

中村 保

「1981年、K 2 - 西稜を登り頂上直下10メートルのところにきたとき、私はパートナーの大谷映芳さんに先に頂上に立ってくださいと言った。が、大谷さんは“K 2 は君の山だ、先に乗ってくれ”と私を促した。……お互い譲りあった末、腕を組んで歩き一緒に登った。二人同時に8,000m峰の頂上を踏んだのは世界で初めてでしょう。」祝賀会でのナジール・サビルさんの講演の一節です。ナジールさんは1977年に故・吉沢一郎さんが総隊長で25年ぶりにK 2 の第2 登を果たした日本山岳協会隊に参加したが、自身はサミッターにはなれませんでした。そのときの仲間4人はスキルブルムで遭難し今はいないことにも触れ、日本とK 2 の関わりを紹介してくれました。形式ばらない秀逸な話でした。1981年の西稜初登は早稲田大学隊による快挙で、1978年にボニントン隊が断念した新ルートの初登攀です。1985年にパキスタンを来訪した中曽根総理は「K 2 - 西稜の登山のようにパキスタンと日本は手に手を携えて進みましょう」と挨拶したそうです。練達の政治家の感性はさすがです。

ナンガ・パルバットのヘルマン・ブールの未亡人オウゲニエさん、娘さんのクリミエデさんも当然招待され、注目を集めました。日本人にはたいへん親近感をもっています。一つは『ナンガ・パルバット』の翻訳者・横川文雄さんとの親交であり、もう一つはピッケルの件です。ヘルマン・ブールのピッケルの発見者は池田壮彦氏で、1999年7月28日に頂上直下10メートルのところで見つけられました。返還式は2004年4月24日にサルツブルグ郊外の「山は呼ぶ」という博覧会で行われました。オウゲニエさんはしきりに懐かしがっており、日本の皆様にくれぐれも宜しくとのことでした。こちらがドイツ語を分かればもっといろいろ話ができたでしょう。

祝賀行事の式次第のあらましを紹介します。主催者はパキスタン観光開発公社(Pakistan Tourism Development Corporation=PTDC)です。

会 議 2004年7月10(土)イスラマバッド、マリオット・ホテル

オープニング・セッション

開会の辞：パキスタン観光開発公社総裁

挨拶：パキスタン政府観光担当大臣

イタリア大使

オーストリア大使館参事官

歓迎の辞：州政府少数民族・文化・スポーツ・青少年担当大臣

主賓挨拶：パキスタン首相

第一セッション

テーマ：パキスタンの山とK 2 およびナンガ・パルバットの登攀

主 賓：パキスタン政府カシミール問題・北方地域担当大臣

1. パキスタンの山の紹介ーパキスタン山岳会会長
2. K 2 とナンガ・パルバット 登攀の歴史と自身の体験ーナジール・サビル
3. 高山と環境保全ーパーベス・カーン(ライター)
4. 来賓の挨拶ーイタリア山岳会会長、ネパール山岳協会会長、中村 保

第二セッション

テーマ：アドベンチャー・ツーリズム、環境保護、貧困対策



▲コンファレンスで挨拶する筆者

▼ヘルマン・ブール夫人(左)と娘さん(右)



主 賓：州政府環境問題担当大臣

1. アドベンチャー・ツーリズム 現状と展望－アドベンチャー財団理事長
 2. 環境保護と高山の清掃作戦－アイシャ・カーン MGPO
 3. エコ・ツーリズムと環境保全・貧困対策－IUCNパキスタン代表
- パキスタン首相招待による夕食会－公園の野外で

パキスタン政府の精一杯の段取りだったと思います。山岳地帯の環境保全について映像を最大限活用してPRに努めていました。真面目な取り組みがよくアピールされていました。初日の会議にはプレス関係者（NHK、読売新聞も出席）を含めて300人以上のひとが出席し盛況でした。主催者側の力の入れようは首相をはじめ政府関係者のホスト側の顔ぶれを見れば意図が伝わります。が、ナジールさんが指摘するように登山界を知らない政府官僚の発想・対応への批判もあるようですが、いたしかたないところでしょう。日本大使の挨拶は当初は予定されていましたが、当日のプログラムからは消えていました。いささか残念でした。外国人ゲストの挨拶ではイタリア山岳会会長、ネパール山岳会会長の後に突然私が指名されました。まったく予想もしていなかったので面喰いました。下手くそな挨拶でしたが、結果としては日本人の存在を印象づけたと思います。ちなみに私は日本山岳会のJapanese Alpine News 編集人並びに評議員の立場で外国人ゲストの一人として招待されました。日本山岳会から平山会長のメッセージの手紙を添えて宮森常雄氏の「カラコラム・ヒンズークシュ登山地図」を主催者側に寄贈し

ました。

参加した外国人ゲストは26人です。招待状は飛行機代から現地の費用まですべて負担してくるケースと現地の費用のみを負担してくれるケースの二通りがあったようです。招待状が誰に出されたか、その全貌と選択の基準ははっきりしませんでした。日本からは私と富山の佐伯尚幸さんの二人だけが参加しました。日本への招待状は私と佐伯さん以外には日本山岳協会会長田中文男、神崎忠男、大谷映芳、坂井広志、遠藤由加の諸氏に送られたとナジールさんは言っていました。外国人はイタリア山岳会会長と副会長、英国山岳評議会（British Mountaineering Council）会長、ネパール山岳協会会長が組織を代表する立場で参加、ヘルマン・ブールの未亡人と娘さんが特別参加、その他ネパール、スイス、オランダ、ポーランド、リトアニアからの参加で、我々にとって知名度の高い人たちではありませんでした。ショート・ノートイスだったため参加できない人もいたようです。登山関係の国際的な祝賀会としてはボナッティやメスナー、クルト・ディーンベルガーのようなスーパー・スターがいない顔ぶれは華やかさに欠ける催しだったかもしれません。アメリカ山岳会の重鎮の姿はありませんでした。アメリカは癌患者で初めてエベレストに登頂したウオーマーさんに招待状が出されましたが参加していません。

懇親ツアー 2004年7月11－15日 北部地域ギルギット・スカルドへ

7月11日 イスラマバッド－ギルギット（カラコラム・ハイウエーを20時間）

7月12日 ギルギット－スカルド

7月13日 スカルド周辺観光

7月14－15日 スカルド－イスラマバッド

懇親ツアーのギルギット、スカルドへの旅行はハードでした。タイやミャンマーの大使とその関係者なども加わり、7台のマイクロバスに分乗しての強行軍でした。軍隊と警察の車に先導され、いたるところにあるチェックポストを外交官扱いで優先的に通過しました。危険はないと言っていましたが、不穏な情勢であることは警戒の厳しさが物語っていまし

た。通過地点のチラスでは「祝K 2 50周年」の横断幕がかけられ、ギルギットでは地方政府の高官が歓迎、スカルドではボロ競技場の横のバザールにイタリア歓迎の垂れ幕が張られていました。イタリアがスカルドに博物館をつくる計画があると聞きました。

記憶にのこる旅でした。イタリア、英国、スイス、オランダ、ポーランド、ネパールのゲストと同じマイクロバスで30時間ともに過ごしました。親しくなる絶好の機会です。国際会議の行事での楽しみです。だんだんにそれぞれの人柄が分かってきます。一番驚いたのはイタリア山岳会会長・副会長のことです。二人とも英語が話せないので通訳の女性を連れてきていました。会議の日はたいへん寡黙でおとなしい人たちとの印象を持ちましたが、あにはからんや、実際は饒舌で陽気な方々でした。バスのなかではイタリア語で喋りまくり、そのうち歌になりました。

▼軍隊の車に先導されてギルギットへ向かう



オーソレミオ、サンタルチア、後は知らない歌を延々と歌い続けます。同乗者の皆さんは拍手をおくります。ヨーロッパの人たちに溶け込むのは努力がいたると感じました。お陰でイタリア山岳会会長のガブリエラ・ビアンキさんと仲良くなることができました。新しい収穫でした。

H A J 販売書籍案内

書 名	価 格	送 料
1. 雪の住処35年の記録 (H A J 創立35周年記念誌)	3, 5 0 0 円	(4 5 0 円)
2. 天壇の山に挑む (ミニヤ・コンカ1991年隊)	2, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
3. 勇者よ永遠に、ナンガ・パルバット (1984年隊事故報告)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストン・カンリ (1984年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル (1982年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
6. ナンダ・カート (1981年隊事故報告)	2, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
7. 聖地巡礼の旅 (サトバント1990年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
8. “神の河” ブラマプトラの激流を下る (1990～1991年)	2, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
9. 知られざる北部シッキムの山々	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
10. 東部カラコルム	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
11. ナマステ、サラスワティ (1992年隊)	2, 0 0 0 円	(3 1 0 円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰 (1993年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
13. 天女の山 (玉虚峰) (1994年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ (ケダルナート・ドーム1980年隊)	1, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
15. ルンボ・カンリ (1994年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
16. 中国登山の手引き (第5版)	3, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
17. ニンチン・カンサ (1997年隊)	1, 6 0 0 円	(2 1 0 円)
18. NUN登頂 '83	1, 0 0 0 円	(2 1 0 円)
19. 天府の霊峰 雪宝頂 (1986年初登頂隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
20. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 (1991年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)

アルカ・ターグ Camel Expedition

ウルグ・ムスターグ周遊

ウィリアム・ホルゲート（太田康夫：訳）

本書は、地球上最後の未踏査地域への、思い切った、しかし度々困難に直面した探検の報告である。

北のタクラマカン砂漠と南のチベットの荒野に隔てられたアルカ・ターグは、ビクトリア女王時代に少数の探検家が命がけで侵入して以来ずっと、その大部分は訪れる者も無いままになっていた。そして1990年、ウィリアム・ホルゲートとティム・マーティンは、6名のスタッフ、19頭のラクダと共に、辺境の地バシュ・マルグンを出発した。行く手には300マイルにわたって、無人の高原と、氷に覆われた山岳が続いていた。道中の危険と緊張、そして周囲のウィルダネスの厳しく荒涼とした美しさが生き生きと描かれており、読む者を夢中にさせる。

「それは、おそらく世界中で一番、到達するのが難しい場所である。周りの土地の標高が非常に高く、付近には誰も住んでいないという点では、南極へ行くよりも困難である。ビル・ティルマンと私も、行きたいと思ったことがあった。だが、そこはあまりにも遠い。」
エリック・シプトン

朝起きてみると、私達がキャンプをしていた場所は、水の涸れたウルグ川の河床であることがわかった。おそらくアブドゥラは、違う季節にここへ来たのだろう。朝食の時に私達はファンと仲直りし、両国民の不滅の友情を誓った。河床を横切り南東へ向かって出発する。

この谷は、この地点で幅が4マイル程あり、平坦な河床には、何度も移り変わった流路の痕跡が多数あって、乾燥した丘がそれを取り囲んでいる。2ヵ月前ならば間違いなく手強い障害物になった筈だが、9月半ばの今は干上がっている。私達が近付くと逃げ散ってしまう小さな齧歯動物が、川岸に無数の巣穴をあけている。

出発後まもなく、羚羊を初めて見るが、近寄れる見込みはほとんど無さそうである。セインが追いかけて行くが、羚羊にラクダの鈴の音が聞こえず、更に、セインの起こすひどい土ぼこりの雲が平原に伸びていくのも見えない、という無理な想定をしない限り、望みは無かった。当然、セインが羚羊に追いつくことは無く、結局疲れると、

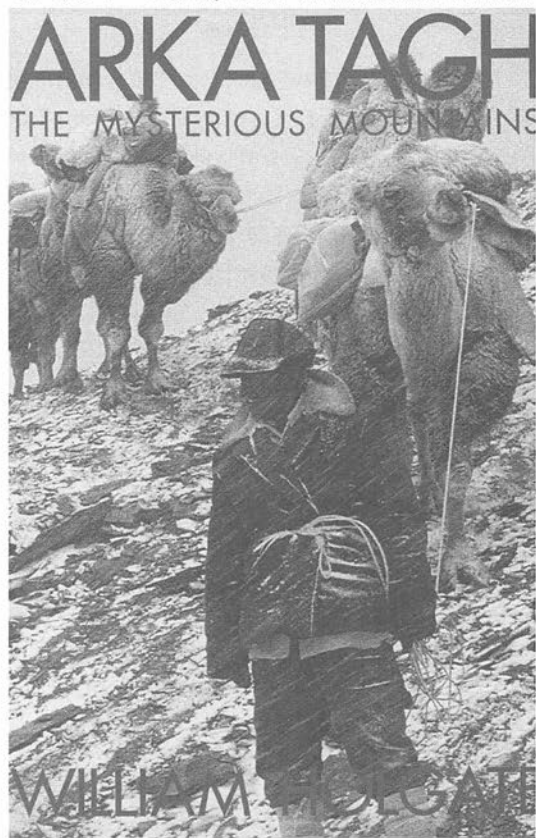
「大丈夫です。追い払いました。」

とでも言うように、意気揚々と隊列に戻った。

南に方向を変えて谷間を遡ると、まず凍った小川が現われ、それはやがて浅い水流となり、上流

に進むと、逆に水量が増えてきた。

まもなく私達は、マーモット（*Marmota bobak*＝ステップマーモット、あるいは *Marmota himala-*





zana=ヒマラヤマーマット)のコロニーの真ん中を進んでいることに気がついた。マーマットは、犬くらいの大きさの太った齧歯動物で、どれも皆、隊が通り過ぎるのを鋭い目付きで見つめていた。セインは、しきりに捕まえようとしては失敗していた。マーマットは、ぎりぎりまで巣穴を離れていて、際どいところで穴に飛び込むのだった。セインが塚から塚へと走り回り、マーマットが穴から飛び出したり飛び込んだりする様子は、見世物のゲームのようだった。

少し進んでから停止する。6頭の野生のヤク(Bos mutus mutus)が、一列になって西の稜線を越えて行くのが見える。キャンプ6は谷間の中央部、川の主流路近くの低い段丘の下である。ラクダ達は、草を求めて歩き回れるように解き放たれた。砂礫の平原には燈色の草の群生が点々とあるが、良い餌場とは思えない。

今や私達は、再びデュトルイユ・ド・ランやリトルダールのルートに合流していた。彼らは、ザルチョウ・ダバンを横断した後、ウルグ川がトグル川とムズルク川を合わせてチャルチャン河となる三川合流点から、ウルグ川の谷間を辿ったのだった。リトルダールは、合流点の近くを渡った際、運良く難を逃れている。

『私はポニーに乗って、川の真ん中にいた。私達のポニーが一頭流されて、一人の男がそれを救おうとしており、私も手伝おうとしていたのである。その時、背後から氷塊が私のポニーにぶつかり、私達は50ヤード流されてやっと岸に上がることが出来た。ポニーが倒れなかったのは、私にとって幸運であった。というのは、水は非常に冷たかったからである。』

リトルダールは南へ進み続けたのだが、デュトルイユ・ド・ランは、私達の現在地付近のどこかにグルナールを残して、南西の山脈の隅々まで、通過可能なルートを探し回った。彼が戻ってみると、雇い人のムーサが『胸部の炎症』に罹っていた。そして彼らフランス人達が再び南へ向かう時には、ムーサは仕事を免除されてチャルチャンへ返されたのだった。

私達は午後の残りの時間をくつろいで過ごし、片言のチュルク語でハッシムに話しかけたりしていた。すると急に、ティムが双眼鏡を取りに走って行った。

「狼じゃないか？」私は、灰褐色のものが、600ヤード離れた段丘の下に沿って忍び歩くのを見た。

「いや、セインだ。」

「ああ。セインのことを忘れてたよ。」私達は再びリラックスした。

「でも、セインはラクダと一緒に、あっちにいるぞ。」

実際セインは、左の方の同じくらい離れた所にいた。そしてその時、私達には狼が見えた。狼はセインの2倍ほどの大きさがあり、もっと身軽く灰褐色で、肩には一本、灰色の筋があった。狼は、尻尾を下げて段丘の裾に沿って進み、時おり頭を上げて様子をうかがいながら、ラクダに忍び寄っていた。と、突然、私達かセインの匂いをかぎつけたのか、少しの間じっと動かずにいたが、やがて、あまり慌てる様子もなく北の方へ走り去った。ティムは、彼なりに、我を忘れて見とれていた。そして私も、この目撃は十分楽しかった。

かつてリトルダール隊が狼に出会ったのは、アルカ・ターグの向こう側だった。その時でさえ、リトルダールは狼の仕業を目にただけだった。ある夜、羊がキャンプから離れることが出来るよ

うにしておいたところ、翌日、緩やかな浅い谷間で、全ての羊が喉を食いちぎられていたのだが、肉は全く食われていなかった。それを発見した男は、リトルダール夫人に食べてもらおうと、羊の腎臓だけは切り取ったが、それ以外の物は放置されたのだった。

ワン・ハイは、北方遠くに狼の大群を見たという。狼が私達に直接危害を加えるとは思わなくても、夜の間に、羊肉が無事なことを確認する。私達は多くの点で先人達よりも装備が整っているが、彼らと違って銃は持参していないので、非常時にも獲物を仕止めることは出来ない。もちろんチームが、折りたたみの鋤と一緒に銃をパッキングしてきていれば、話は別だが。

実際、ラクダ達は、夜じゅう落ち着かなくなった。チームが調べに行ったが、何も異常は無かった。それでも私達は、以後、食糧を守ることに注意を払った。

キャンプ6で1日休養日とすることに意見が一致し、翌朝、チームと私は谷沿いのハイキングに出る。すぐに遠くの方に5頭の羚羊を見つけるが、角が無いので、しばらくはチベットノロバだと思っていた。1時間半にわたって静かに追跡し、400ヤード以内まで近付いたところで羚羊は驚いて逃げ出した。羚羊にとって運の良いことに、私達はカメラで武装しているだけだった。しかしながら、長焦点レンズも無く、隠れ場所で2週間もシャッターチャンスを待ったというわけでもないで、私達の野生動物写真は全般的に出来の良いものではない。少なくとも私の言い訳は、そんなところである。

被写体にもっと近寄ることに決めて、私はマーモットのコロニーの方へ注意を向けた。マーモット達は、私達の奇怪な行動を、傍観者としてずっと見ていたので、不意打ちをくわせるのは無理だった。そこで私は目をファインダーに当てて、まっすぐに彼らの方へ歩いた。彼らは前足を持ち上げ、鼻を尊大に空に向けて、塚の上に平然と座っていたが、私が15ヤードくらいまで近寄ると、穴に飛び込んだ。まるで「飛び込め！飛び込め！」と、警報が鳴り響いたかのようなだった。それでも、私の巧妙な策略は成功した。出来上がった写真は、被写体の見分けのつく数少ない写真のひとつになった。

午後はキャンプで、ダー・ウェイがハーモニカでサウンド・オブ・ミュージックの中の曲を吹くのを聞きながら、装備の修理をしたり読書をしたりして、のんびりと過ごす。ダー・ウェイ自身は、ずっと物静かで有能であった。もっとも、彼がスポーツ好きだという第一印象は、扁平足をひきずる歩き方や、頑固なチェーン・スモーキングによって、既に崩れてしまっていたが…。正式な発表は無かったけれども、彼は、中国側の副指揮官か、あるいは影の権力者とさえ見做されているようだ。中国は今なお、あらゆるレベルで技術的、政治的に二重の統率体制をとっているもので、これはありえないことではなかった。ある夜など私は、皮の上着を着たダー・ウェイが、許可されたルートを進むことを拒否した私達に向かって拳銃を抜く夢まで見てしまった。

ダー・ウェイは、それ程たびたびハーモニカを吹いたわけではなく、ジョージが主なミュージック・メーカーであった。彼が繰り返し叫ぶオールド・ラング・サインが、音楽と言えるならば…。私自身は口笛のレパートリーが広いのだが、悲しいことに唇が腫れ上がってひび割れている今は沈黙を余儀なくされている。特にチームが、私の口笛が聞けないのを悲しんでいる筈だ。

朝は、たまに雪がちらついていたが、今は日が照って暖かい。私は、日記をつけようと、テントの入口にすわった。

『多くを語り過ぎないことは、概して易しくかつ賢明であり、欠点を堪え得るものにするには、それで十分である。』これは、チームにとって救いの言葉である。外では彼とセインが抱き合ってた寝しており、好奇心の強いセキレイが1羽、それを見守っている。西側の山並は川から離れていて、雪のすじの見える斜面が私達を取り巻いている。その向こうには、雪をまとったピークが鋸のように連なっているのが、流れる霧に霞んで見える。雁が隊列を組んで飛び、翼が陽光に染まる。頭上には白い縁どりの雲が紺碧の空を流れ、地面に影を落としている。蜜蜂の羽音がテントの脇を過ぎ、川下に遠ざかる。全てのことがあまりにものどかで、私は、うとうととしてしまった。

物の影が長くなる頃、一陣の涼風が吹き、私達

は皆、生き返った。ワン・ハイだけは1人で散歩に出たままだった。その時までには私は、彼の当初の外面的印象を改めていた。つまり、彼は今だに世慣れたふりをしているけれども、とても自信家とは思えなくなったのだ。

「手で物を食べるのは、やはり野蛮だと思います。」と、彼は言っていた。これは不幸なことだった。遠征期間の大半は羊肉にかぶりつく生活であり、髭も衣服も結局、脂肪とほこりがどろどろに混じったもので固まってしまうのだから。ワン・ハイは、これほど長いあいだ家を離れるのには慣れてなくて、家では奥さんの尻に敷かれているくせに、明らかに奥さんや幼い娘を恋しがっているのだと、ジョージは言った。私は、ワン・ハイが進んで隊に参加しているのではないと思った。実際、彼は積極的ではなかった。それでも、最善をつくそうとはしており、賓客を地元民から守る必要性から解放された今は、いつも非常に人の良い感じだった。彼の家族のことや、私達のヨーロッパでの生活について、不十分ながら何とか話をすることが出来たが、彼はジョージ程には英語がうまくなくて、「その通りだと思います。」というのが、私達の問いかけに対する、お決まりの返答だった。一方、私は、彼の自信の無さを見て、中国語をしゃべってみようという気になった。といっても、いざとなればジョージが通訳してくれるので、それほど真剣にはならなかった。

全員が互いに何とか意志が通じるのは、驚くべきことだった。アブドゥラは少し中国語をしゃべった。また、ファンは少しチュルク語が出来たが、自分が思っている程には通じていないらしく、アブドゥラとハッシムは、ファンが彼らを笑わせようとして軽い冗談をとばしても、困ったような顔をしていることが多かった。ファンは英語も少ししゃべり、ジョージやワン・ハイの言うことを補った。そしてもちろん、私の基礎的な中国語と、私達の蓄積したチュルク語のフレーズも使った。あとは身振り手振りだった。確かに時々誤解が生じたが、そのほとんどは故意の誤解ではないかと、私は思っている。

私が夕食の支度をしていると、ワン・ハイが戻ってきた。この、シシカバブとクミンと米飯を混ぜ

合わせた料理は、私の、皆の健康な生活への貢献であり、うまく出来たと思ったのだが、ダー・ウェイが別にトゥガラシ料理を作り始めた時には、がっかりした。

MSRストーブは、高度14,270フィート(4,350m)のここでは、やかん1杯の水を沸騰させるのに1時間近くかかり、あまり役にたたないことがわかってきた。3台全部をいっしょにして使うと多少は改善がみられるが、そうするとブロー・トーチ並の燃料を食うのだった。それは恐ろしい量であり、燃料の備蓄の急激な減り方が心配の種になっていた。

翌日、早朝の写真を撮ろうと谷間に出た私は、眼前の光景に息を飲んだ。ウルグ・ムズターグ、「偉大なる氷の山」が、そこにあった。並んでそびえる第2峰を影のごとく従えて、朝日に輝く純白のピラミッド！40マイルの彼方にあっても、荘厳で威圧的である。山は、まさに前日私が目で探した位置にあった。その時は雲に覆われていたのだ。私が見ているうちに、再び雲が出てきた。80年代の暗黒の日々には、私は山脈を一目見るだけで満足しようと心に決めていた。しかし、それがなかった今は、いっそう食欲をそそられるだけだ。

ウルグ川の河床のほぼ中央部を、何度も川を対岸へ渡りながら進む。既に、アブドゥラの知っている範囲を越えているようだ。もっとも、彼がどういう判断に基づいて進んでいるのかは、よく分からない場合が多かったが。彼は2年前にヒルトンもしくはヒントンの隊をガイドした時に、この北のどこかで泊っている。ファンも1984年の遠征の際に、近くまで来ている。その時はジープが使われ、ムズルク・ターグを越えられず、アチク・コル平原を延々と横切って川の合流点に出ているが、私達が現在いる谷間を進もうとして、洪水のために退却を強いられている。

出発後まもなく、4頭のオロンゴ羚羊(Pantholops hodgsoni)を驚かせてしまう。見事な長い角は、ごくわずかにカーブして、大麦キャンディーのように螺旋状である。彼らは山の方へ飛び跳ねて行ってしまった。

1時間後、停止する。アブドゥラが食糧とラクダの餌をデボシ始める。私達は、その時まで、帰路に別のルートをとることになっていたの、少々

うろたえた。私は、そこで激しい口論が始まる予感がしたが、驚いたことに、口論はファンと私自身との間で起こったのではなかった。ジョージが、二言三言通訳した後、彼自身の意見を言い始めたのだ。それから20分間にわたってジョージとファンは、鼻を突き合わせて唾を飛ばしながら、あらん限りの大声をはり上げ続けた。その間、他の者はすわって嵐がおさまるのを待った。ワン・ハイとダー・ウェイは、当惑した時の仕草で、靴で地面をこすり、アブドゥラとハッシムは徹底して無関心をよそおい続けた。ティムと私は大いにおもしろがったが、事の成り行きに面食らっていた。

ジョージが、ファンの言う事は間違っていると言い、ファンがジョージに、黙って命令に従えと言っているらしいが、実を言うと私は口論の内容を把握しきれず、また、ワン・ハイの説明も曖昧だった。平和をもたらそうとする、あらゆる試みは失敗し、あとはもう両人が精力を使い果たすのを待つしかなかった。それから5分間、重苦しい沈黙が続いたところで、私達はルートの話を持ち出した。最初、ファンはワン・ハイを通訳に使おうとしたが、これはすぐに無理と分かり、やはり再びジョージを使わざるを得なかった。

「別のルートだと、もっと長くなるだろうと、ファンさんは言っています。」と、ジョージが伝えた。「アブドゥラはファンさんのように先の事を考えようとしなくて、ラクダの餌を使い過ぎるんだそうです。さっきの話は、たぶんファンさんの方が間違っています。あの人は、ここに物を少し置いていつて、このルートをまた戻ってくる方が良いと考えています。私は、あの人の言う事を繰り返すだけです。私は只のつまらない通訳です。」

私達がファンの意見に同意すると、今度はファンが驚く番だった。私達は目標をこれ以上細かく分けたいとは思わず、ティムと私は大体同じ結論に達していた。すなわち、まず最初に氷原の向こうの新しい峠を越え、それからカラ・ムラン・ダバンを越える、という主目標に全力を注ごうと決めていた。穀物4袋と少々ガソリンに十分に覆いをかけてデボシ、引き続き谷間を遡って行く。

湿っぽい太陽光線の中で遠くから見ると、谷の両側は淡い黄褐色、河床は灰色に見えたが、その

色は、近付いてみると、まるで点描画家の絵のように、草の黄色と小石の緑、それに土の淡紅色で構成されていた。このクローズ・アップは、見ていて少しも飽きることがなかった。また、谷の両側には野生動物も豊富だった。特にオロンゴ羚羊と黒い野生のヤクの群れが多かったが、1マイル以内に近付くと、すぐに逃げてしまうのだった。チベットノロバの30頭程の群れが上の尾根に現われて、私達の遅々とした歩みをじっと見てから、渦巻く砂塵の中を地平線の彼方へ駆け去って行った。ほっそりした軽快な動物で、遠くからは羚羊と間違えやすい。草の乏しい土地で彼らが生きのびるためには、広大な生息域を持っているのに違いない。実際、このような荒涼とした土地に数多くの動物がいるのは、驚くべき事だった。地面は、文字どおり足跡だらけだった。中には数ヵ月前のものもあるのではないだろうか。地表面の固い部分が破れた後の風や砂の影響は極めて少ないようである。確かに私達自身の足跡は3週間たってもはっきり見えた。

段丘があまり急勾配になってくると、谷の横を登り、それから再び滑り降りて河床を進む。1時間に何回も、6フィートから60フィートの高さを登ったり降りたりしなければならなかった。降りる時が最悪だった。いちばん危ないのは、先頭のラクダが降りた直後だった。いつも、ある角度で縁にさしかかるのだが、後続のラクダ達は先頭と同じコースを辿らず横にそれて、下がどうなっているか注意を払いもせず、西部劇のインディアンのように横一列になって斜面をどっと駆け降りることが多かった。今ではもう私達は、このような場面でもあわてることは無かった。平らなところでは、手放しでラクダに揺られながら、いつの間にか、うとうととしていることが度々あった。ラクダの歯が何かを噛んだりきしったりする音、パタパタというソフトな足音、そしてロープの擦れる音は、私達の生活の一部になっていた。皆、無意識のうちに自分なりのラクダの乗り方が身に付き、他の者の乗り方が、かなり奇妙に見えるのだった。だが、どのラクダも、1時間に2マイル半の、ほとんど一定のスピードで歩いた。これは、荷物が減ると少しだけ速くなり、はるかに困難だった

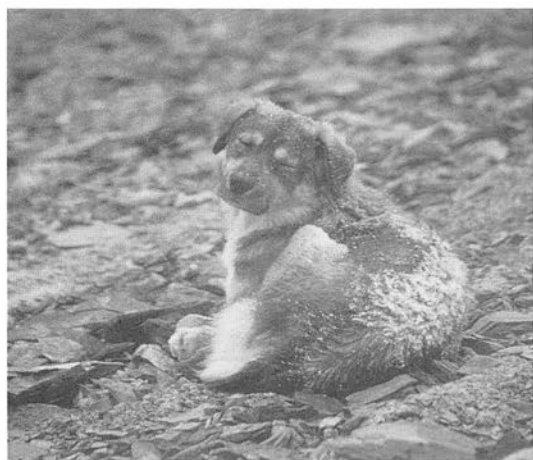
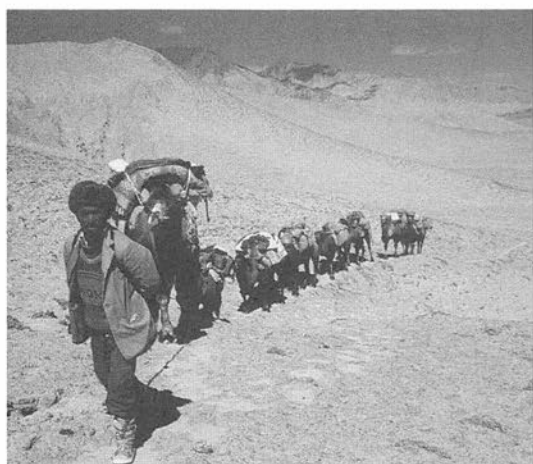
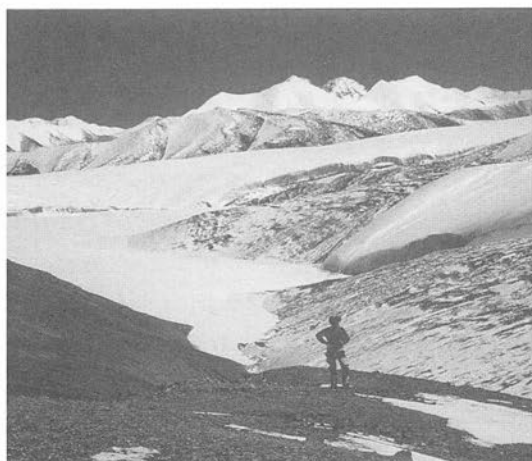
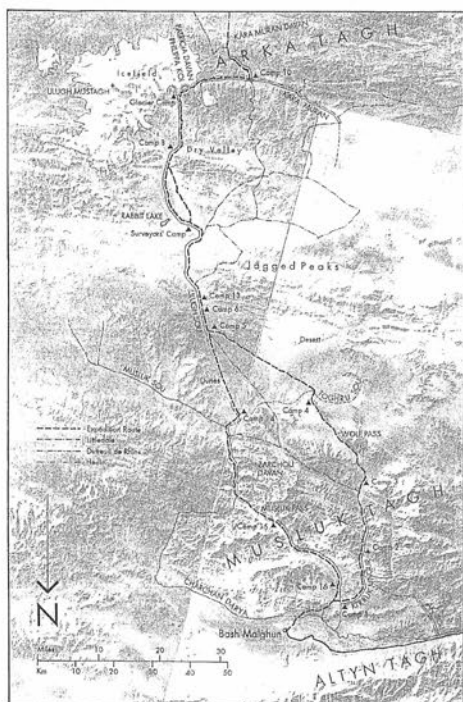
リトルダールのキャラバンが1日6～7マイルだったのに対して、1日平均15マイルという相当なスピードになった。しかしながら、草の不足と高度によってラクダは既にかなり参っていた。こぶは日増しに小さく薄くなり、糞は、バシュ・マルグンで見たような繊維質の大きな緑色のかたまりではなくて、小さな固いボール状になってきた。また、ラクダにより気性が違う事にも気付いた。1～2頭は喧嘩早く、他は臆病だが、概ね十分に協力的だった。そうであっても、後足は避けた方がよい。誰かが危険範囲に入り込むと、痛烈な、予期せぬ一撃が飛ぶことがある。それに較べると危険は小さいが、ラクダの前にまわると、今度は唾や吐き戻した草が飛んでくる。そんな事があった後のティムの顔は、刈り株の残る畑のような様相を呈していた。ラクダ達は、めったに喧嘩をしなかったが、喧嘩になると、互いに相手のこぶに噛みつきこうとした。たいてい前側のこぶを狙っていた。アブドゥラとハッシムはラクダをいつも注意深く扱っていたが、言うことを聞かないのがあると、最終決定権は自分が握っているのだという事を実力で示した。鼻輪を強く引いたり、端綱で叩いたり、更に、究極の制裁として大きな石を至近距離から首すじに投げつける場合もあった。いつかラクダが復讐するのではないかと、少々気になる。

午後遅く、谷は岬状の岩稜を迂回するように西へ曲がった。かつてリトルダールは、おそらく本流から逸脱して、西に向かって1本の広い谷を遡った。その方が易しいルートだと考えたに違いない。彼は、最終的に南へのルートを発見するまでに、周囲の山の中で試行錯誤を繰り返したため、時間的にも動物の消耗の点でも結局高くついた。デュトルイユ・ド・ランもまた、西寄りのルートをとろうとして同様の結果になった。私達は新しいルートでもっとうまく行けるかどうか、やってみなければならない。

本流が再び南へ向いてきたのでそれを辿り、まもなく古いキャンプの跡を見つけて、そこに泊まることにする。それは測量者が1960年代か70年代から使ったキャンプで、竹竿と陶器のかけらが少し残っているだけだった。周辺地域を測量する際のベースとして使われたらしい。これまでのところ

地図は、川の流路以外の地形については完全に信頼出来たが、以後、それまで程には信頼出来ないのが分かることになる。

ジョージは、ファンとの口論の原因については説明しようとせず、「ばかな人間と一緒に仕事をするのは嫌いだ」と言うだけだった。状況から見て、私は、彼が言っているのはティムや私のことではないと思った。中国社会の、時代遅れの、厳しい階級制の中では、ジョージがリーダーと口論する気を起こすこと自体、普通ではなかった。それが後で彼に悪い結果をもたらさねば良いが、と私は思った。それは問題無い、とジョージは言った。自分はファンとは違う部門で働いているので、本音を言うのだと。彼が常に、相手に嫌がられるような内容を通訳しなければならない難しい立場にいる事を考えると、彼は非常によく耐えていた。すっきりと整っていた容貌は、もはや衰え、髪が常に驚きのポーズを形作っていた。唇や顎を見ると、さまよえる逃亡者のようだった。まだ私達は他人のユーモアを理解しようとしていたが、あまりうまくいっていなかった。ジョージは、よく場違いな時に笑った。たぶん私達も同じだっただろう。このような時でもジョージは依然として快活であり、しきりに私達の生活について知りたがった。しかし彼は明らかに隊の最年少者だった。他の者は彼を「チェチェ」と呼んでいた。時おり彼は、まわりの世界について、びっくりするほど純真な事を言った。彼の今までの主な情報源は、古いテレビ番組とボイス・オブ・アメリカだったので、私達の西欧での様々な生活の様子を聞いて、かなり驚いていた。確かに、ジョージの、規則で縛られた厳しい生活ぶりと比較すると、私達が比較的自由で快適な人生を送っている事は否定出来ない。彼は私達に、学校での生活の事、ルームメイトの事、家族の事、将来の希望等を語った。今や、話は、東方へ帰る事、上級学位を取るために、出来れば外国を旅行する事、を中心に展開したが、どちらも許される見込みは無かった。私達は北京で起こった事件についても話をした。ジョージは、友達は皆それに関心を持っているけれども、もちろん皆「ノンポリ」で、今はそれが賢い選択だ、と言った。私は、それ以上は追及しなかった。非常



上：遙かにウルグ・ムスターグ（6,973m）を望む
 下：氷河舌端のキャンプ
 左下：セイン

に好ましく思う相手を、その人の罪を問うような危険な議論に引き込みたくないと考えれば、それが皮肉にも友情の妨げとなる。

翌朝、私達が出発する頃、薄い氷が川を流れていた。その氷が消えると今度はウルグ・ムズターグとそれを取り巻く氷原が雲の中から姿を現わした。そして一日中ずっと谷の奥に見えていた。氷原もバットレスを形成する山々も広く大きかったが、その境界線は手前の丘の肩に隠れていた。

私達は南へ進み続けた。それから谷に沿って西に回りこんだ。一番近い氷河の舌端が、谷の側面の上に見えるようになり、私達が近付くにつれて次第に遠くなっていくように感じられた。私達は、周囲の山々に対しては本当にわずかしか前進していなかった。垂直方向への進行は、全く目に見えない程だった。ウルグ川が流れるのを見て初めて、高度を稼いでいるのが分かるのだった。ラクダに揺られながら私は苦労して計算した。私達の稼ぐ高度は1日600フィート、平均すると1時間に100フィート、1分間に1フィート8インチ、3秒毎に1インチである。ゆっくりとではあるが確実に登っている。日暮れ近くになって、小さな支流の流入口に入り込み、山の北側の陰にキャンプする。

テントを張っているうちに、気温が急激に下がった。風が強くなり高度が上がった事と相まって、生活は更に困難になった。ロープを結び付ける事から、岩混じりの固い地面に穴を掘る事まで、あらゆる動作に時間がかかるようになった。冗談の飛び交うキャンプ生活は、ゆっくりと終わりに近付いていた。夕食後、ファンとアブドゥラが頭痛薬を貰いに来た。また、ファンの眼鏡が壊れ、私達は紐と針金で直した。ファンは予備の眼鏡を持っていなかった。

ティムと私は、寝袋に入った後も普通1時間くらいは起きていた。明りが、黄色いテントや赤い寝袋を照らして、くつろいだ雰囲気醸し出し、私達は、紅茶を飲みながら、日記を付けたり装備を直したりした。二人とも、読み応えのある本を持ってきており、かなりの量を読んでいた。しかし、私がサルトルの「自由への道」を持て余す前に、ティムが「ユリシーズ」を持て余し、たいていは彼の方から、トランプをしようと言いつ

だった。ティムと私が一つのテントを使うのは、ヨークシャー・ムーアでの一晩を除けば初めてだったので、悲惨な状況になることも考えられたが、そうはならなかった。私達は経歴が異なっていて、相手の身の上話や意見に耳を傾けた。そして、別々の道筋から同じような見解に辿り着くことが多かった。今まで、ティムはヨーロッパとアフリカに、私は南北アメリカに、どちらもたいてい単独で出かけていた。昼間は、いろいろと時間を取られることが増え、夜はテントの中のはこりや臭気がひどくなってきたが、これ迄のところ、お互いに全く問題無く我慢出来る存在だと思っていた。それは多分、二人共お人良しで呑気で、元来やさしい人間だからだろう。また、もっと大規模な中英合同隊の一員になるのは耐え難いと思っている点も、共通していた。

翌朝、私は誰よりも早く目を覚ました。いつもに無い事だった。紅茶を入れて飲む。誰も起こさずに出ていくのには失敗したが、ウルグ・ムズターグをもっとよく見ようと思い、キャンプの背後の斜面を登る。ここからは、双子のピラミッドのように、すばらしくきれいで均整がとれて見える。二つの山頂部の岩の下は雪の急斜面になり、その縁が朝日にシルエットとなって輝いている。雪はおそらく下の氷河まで滑り落ち、最終的には谷の向こう側の茶色い丘陵地へ流れ出ることになる。じっとしているにはあまりにも寒いので、キャンプの上の低い岬状の所を歩き回る。そこに一人でいるのが嬉しかったのも束の間、一日の生活が始まる物音が聞こえてきて現実には引き戻される。

これまでと同じく、ルートはウルグ川沿いである。もう川は細くなっているが、氷が張っていて、ラクダは渡るのを嫌がった。ラクダをなだめてゆっくりと氷の上に連れていくのだが、表面が凍っているだけなのでバリバリと割れてしまい、ラクダは冷たい水の中に沈むのではないかと一層おびえた。幸い、深くはないので、不幸な事態が起こることもなく渡った。対岸に上がり、夏を越して残っている汚ない雪のこぶを縫って進む。谷は幅広くなり分岐した。その合流点には、雪を被った山々のパノラマが展開した。北側には赤い色の崖が、空を背景に河床から斜めに立ち上がっていた。右手

の灰色の谷は、乾ききった砂地となり、西へ向かっていた。遠くに見える鞍部の向こう側にはリトルダールやデュトルイユ・ド・ランのルートがあるが、既に私達は、現時点では未知数の、左手の谷へ入ってみることに、意見が一致していた。ウルグ川の流れは、この谷を南へ導き、最後は遠くの尾根の陰に消えていた。

私達は流れを辿った。互いに呼び交して、西側に接する丘陵地へ上がれる可能性のあるルートを指摘しながら進んだ。いつかは谷の奥で氷河にぶつかるだろう。そして、それ以上南へ進めなければ、再び私達自身の足跡を辿って、戻って来なければならないだろう。その時には、この丘陵地が代替りのルートになるだろう。丘の連なりが何列も層をなして並び、それは遠くのもの程次第に高くなって、最後には、広大な雪原か氷原かの上に大山塊を形成していた。夏に雪解け水が丘陵地の基部に切り込んで、最下部の100フィート程は切り立った壁になっているので、取りつくのも容易ではないだろう。

南へ進むにつれて、ウルグ・ムズターグの2つのピークも私達の東側の稜線の上を横に動き、私達と共に旅をした。私は、2つの山頂が同一方向に重なって見えた時に、現在地を確認した。2時間後、東側の丘陵は後退し、私達は、クレバスのひどい、大きな氷河の、崩れかけた壁の前を横切っていた。ずっと奥で氷河は2本に分かれていて、1本は東に、もう1本は南に上がっていた。この2本の凍った流れが、ウルグ・ムズターグの北西面を挟んでいた。

氷河の前を横切るのに1時間かかった。私達は、狭くなった谷の本流沿いに南へ進み続けた。雪解け水によって出来た段丘が、次第に近くなり段差が大きくなってきた。セインが横の斜面を登ろうとしたが、挫折して退却した。段丘は更に頭上高くそびえ立ち、やがて兩岸は、迫ってきた側壁に移行した。前方から一陣の冷たい風が吹いた。もはや、高い岩の障壁に、行く手を閉ざされたかに見えた。だが、まだ手はあった。私達はラクダをせきたてて水流そのものに入り、音の反響する壁に挟まれた、凍るような流れの中を進んで、その向こうの隠された世界に入ってしまった。

この新しい世界は、氷の世界だった。ゴルジュを脱した私達の前には、高さ100フィート以上の白く輝く壁が、左右兩岸に渡って立ちはだかっていた。その壁には深い割れ目が形成され、割れ目の奥の方は青緑色に鈍く光っていた。表面には氷のレースのカーテンが、大理石のような氷柱や重量感のあるスラブ状の部分に垂れ下がり、氷の神殿を飾るタペストリーのようなようだった。下の雪のトンネルからは、ウルグ川が音も無く流れ出していた。

壁の手前40ヤードくらいの所にキャンプを設営する。壁が崩れる様子は無く、そこは比較的安全だと思われた。私達がテントポールを扱っている時、私は壁面（フェース）を見上げた。そして、その氷河には本当に顔（フェース）があるのを見た。威厳のある老人の顔が、氷の壁の真ん中の突き出た部分に刻まれていた。その老人は、私達の滞在中、哲人のような顔で見守り、私達が毎朝起きる頃にはシルエットとなって蒸気を立てているのだった。

まだ日暮れには間があった。急いで話し合った末、目指すルートの偵察に行かねばならないという事を、気が進まない様子ファンに納得させる。ファンとティム、私の3人がアブドゥラを伴い、歩いて出発する。

私達は、氷河の、手前から見て右手の縁に沿って進もうとした。氷河は谷を流れ下っているので、厳密に言えば左岸ということになるだろう。最初はキャンプの上の斜面を登らねばならなかった。それから、氷河と平行に山腹を苦労して進んでいった。氷河の舌端の氷の崖は側面にも続き、山が氷河の下に潜り込む部分は、深い溝になっていた。この溝は大体V字型をなし、Vの字の左側は垂直に近い氷、右側が私達の攀じ登っている山腹であり、そこは左側ほど切り立ってはいなかった。山は激しく変成作用を受け、無数の平板状の片岩から成っていた。木の葉仰のような小さなかけらもあれば、気違いじみた角度で突き出している大岩もあった。所々、垂直に立った剃刀の刃のようを岩が多数、まるで川のように斜面の上から下へ続いており、また、近くでは、剥がれやすい白雲母で出来た大きな本から、1枚ずつページをめくることが可能だった。各自それぞれのルートをとり、

私は次第に山腹を登って氷河から離れた。切り立った氷河の縁の上には、見渡す限り純白の雪原が続いていたが、凸面になっているために、数百ヤードより向こうは見る事が出来なかった。私達の進行は遅く苦しいものだったが、そのルートは有望だった。私達は、最初、南へ向かい、氷河の縁が山の側面と共に曲がるのに従って、南西方向へ緩やかに回り込んだ。ルートが曲がっている上、山腹には岩稜と浅い谷とが繰り返して現われるので、遠くまでは見通せなかった。私が斜面を右に登っている間、他の者は深い溝の中に留まっていた。氷河の壁を見下ろす小さをコルに辿り着くと、私は腰をおろして皆が登ってくるのを待った。

前方には壮大な円形劇場があった。それは、2つの尾根と氷河の側壁に囲まれた、半円形の窪みで形作られていた。氷河の壁に塞き止められた小さを池が、澄んだ緑色の水をたたえてステージを構成し、背景幕は、鐘乳石状の脆い氷が垂れ下がった壁面自体だった。その上には、濃紺の空を背景として純白に輝く氷河の表面に、夕刻の太陽が雪雲の影を落としていた。

まもなくアブドゥラとティムが到着し、私達はしゃがんで、つららが融けた時に氷河の壁から水面に広がる波紋をじっと見ていた。しばらくたってファンが息を切らしてコルに着いたが、その後の彼の行動にはびっくりさせられた。ファンは仰向けに寝転び、両脚を上げてバタバタさせながら声を限りに「勝利！勝利！」と叫んだのである。もちろん「勝利」とは、前方のルートが通過可能だという事であって、ファンがコルに辿り着いた事などではない。あいにく、次の尾根は、ここよりも高く、たぶん更に高い尾根が、その向こうに次々に続いていると思われるため、通過可能かどうかは全くわからなかった。しかし、ファンは感情を抑えようとはしなかった。

アブドゥラは見通しについてあまり楽観的ではなく、次の尾根に向かって行った。残りの者は、付いて行く元気が無く、アブドゥラが池の方へ滑り降りて対岸の斜面をゆっくりと登っていく間、がれ場でぶらぶらしていた。アブドゥラが向こうの稜線まで往復するのに1時間以上かかり、それまでに日が沈んで気温が急激に下がってきた。アブ

ドゥラの報告は、あまり喜ばしくない感じだったが、唯一私に理解出来たのは、「大きい水」という言葉だった。私達はジョージに通訳してもらおうと、急いでキャンプへ下った。

キャンプへ帰る途中で雪合戦をしたので、あまり悲観的になっている暇は無かった。私の投げた何発かがティムに命中し、その内の一発でティムのポケットの中が雪だらけになった。ティムは、私が合同隊の隊長としての真剣さに欠けている、というような事を言った。その通りだった。ここ二三週間の体験と、差し迫った峠越えへの意欲とによって、私は人生をより一層楽しんでおり、あまり心配していなかった。ルートをめぐる絶え間ない論争が続いている事はわかっていた。しかし、進むのが困難になればなる程、私は意気込みを増して、次の日を楽しみにして待った。

私達は子羊肉のカレー料理を食べながら「大きい水」について話し合った。それは、ダー・ウェイが私達の心の状態をより良くしようとして作ってくれる、おいしい料理の一つだった。アブドゥラの知らせが良いものではなかっただけに、これは有難いことだった。アブドゥラの紛らわしい説明から私達に言えるのは、そのルートの先は湖に遮られている、という事だった。アブドゥラは、通過は不可能だと確信していたが、私達は、それくらいであきらめる事は出来なかった。5人（今日の4人とジョージ）が翌日、空荷のラクダにルートを登らせることにした。ワン・ハイ、ダー・ウェイ、ハッシムは、残りのラクダや荷物と共に、あとに残ることになった。早朝出発することを決定して、私達は床に就いた。

計 報

丸山芳雄(享年66歳)日本ヒマラヤ協会評議員、秋田県山岳連盟元副会長、6月22日、肺ガンのため逝去。秋田高校山岳部から中央大学山岳部で登山経験を積み、カラコルムのチョゴリザ、ルプガル・サールに挑戦。東北海外登山研究会の代表として一時代を築いた。89年には中国、アルチン山初登頂、その後、秋田隊を率いてチョー・オユー登頂、マナスル挑戦など数々の遠征を行った。

地域ニュース

《パキスタン》

K 2 (8,611m)に登頂

南東稜からK 2の登頂を目指していた、日本勤労者山岳連盟隊（近藤和美隊長ら9名）は、8月7日、矢野利明(51)、清野嘉樹(42)、望月泰彦(44)、川嶋高志(44)の4隊員とH A P 2名が登頂に成功した。望月は無酸素登頂。

一方、南々東リブからの登頂を目指していた、どさんこ同人隊（松本政英隊長(41)ら5名）も8月16日、隊長、乾飛鳥(32)、竹迫智也(29)の3名が登頂に成功した。H A Pは使用していない。

また、1986年ポーランド隊によって初登攀された南々西稜は、メスナーによって「マジック・ライン」と命名されているが、スペイン隊の6名が挑み、8月16日、3名アタックした内のヨルディ・コーミナスが同ルートの第二登に成功し、どさんこ隊のキャンプで休憩した後、18日B Cへ帰着した。

《中国》

ムスターグ・アタ(7,546m)で行方不明

ムスターグ・アタの通常ルートからの登頂を目指していた東京の村上芳男(57)、宇野徹(47)ペアの内、宇野が8月11日正午頃、C 3上部でフランス隊に確認された以降、行方不明となった。C 3にシュラフが残されていることから頂上アタックに向かったのアクシデントと思われるが、詳細については不明。

チャー・シャブ(7,022m)初登頂

中国、チベットのチャー・シャブ(Qow Xab) 初登頂を目指していた日本教員隊の坂原忠清(59)隊長とチベット族H A Pが北西面から、8月6日、同峰の初登頂に成功した。同峰はチャー・オユーの北々西にあり、1989年、大阪市立大学隊が初登頂した、スークェン・リ(7,308m)とパルン氷河を挟んで対峙しており、かつてはパルン・リと呼ばれており、2001年12月20日付でネパールが103座をオープンした折りに「PALUNG RI(7,012m)」と発表し

た山と同一と思われる。

モンダ・カンリ(6,425m)登頂断念

仙台山想会が中国、チベット自治区のモンダ・カンリに派遣した登山隊（高橋二義隊長(62)ら7名）は、6月11日、ブマヨンツォ東岸約5,000m地点にB Cを設営。西氷河にルートを取り、13日、5,350m地点にA B Cを出し、17日、6,100m地点に到達したがクレバスに阻まれて登頂を断念した。

チョモラーリ(7,326m)第三登に成功

イギリスのJ.A.クリマとロジャー・パインがチョモラーリの第三登に成功した。当初は北西稜を目指したが6,000mで断念し、96年長野と中国合同隊ルートに転進し、2日目に南稜の科尔(5,800m)に到達し、強風で一日停滞した後、5月7日午前1時半に出発し、1,500m差を登って午後5時に南稜の科尔に帰着。翌日3時に科尔を出てB Cへ下り、その日の内にラサに戻った。

マカルー I (8,463m)南東稜から登頂

フランスのヤニック・グラジアニが5月30日、チベット側南東稜からマカルー I の登頂に成功した。当初は、C.トームスドルフ、P.ワグノンと東稜を目指したが断念し、南東稜に転進したが、7,800m地点で他の二人が断念し、途中から単独となって登頂したもの。

マカルー II (7,678m)新ルート開拓

フランスのJ.C.ラファイエが単独でチベット側からマカルー II に新ルートを開拓し、5月16日初登攀に成功した。その後、I 峰(8,463m)へ縦走を目指し、八千メートル峰12座目を狙ったが断念。

甘肅省、冷竜嶺(5,254m)に初登頂

未踏峰クラブ隊（伊東亨隊長(74)ら11名）の山本誠治(59)、中村正博(60)、宮崎良平(54)が、8月1日、初登頂に成功した。

《キルギス》

雪崩で11名死亡、30名不明

キルギス東部、天山山脈のハン・テングリ(7,010m)で、8月5日から7日まで雪崩が相次ぎ、チェコ、ロシアなどの登山者11名が死亡、約30名が行方不明となった。日本人の被害者はいない模様。

《ネパール》

ミンマ・シェルパ連行・誘拐？

エヴェレストに10回登頂経験のあるミンマ・シェルパの家族が明らかにしたところによると、7月30日、治安当局を名乗る7人組が自宅に押し入り「尋問のため」と言って同氏を連行した。犯人は不明だが、毛派の犯行の可能性もあり、8月25日現在、行方不明である。

また、同国中部のパルパ地区で8月1日、地雷が爆発し、政府軍兵士3名が死亡した。毛派の犯行と見られている。7月31日には、東部のラメチャープで政府軍が毛派掃討作戦を実施し、4名を殺害した。

トピックス

パサー峰BC訪問・成功裡に終了

昨夏、パサー峰で登頂後クレバスに転落、救出されたものの死亡した高橋敏雄隊員の慰霊のため8月9日、日本を出発した奥様の高橋久美子さん、酒井國光隊長、天城敏彦、志小田美弘両評議員の一行は、15日、BCを訪問しカラコルム・ブルーの下、無事慰霊を行い、23日予定通り帰国した。

Books

山の世界

編者の梅棹忠夫は本書を「そもそも、山とはどのようなところなのか」このような疑問をあきらかにすることを目的に、登山、山の科学や文化、暮らし、環境保全などの分野を網羅した最初の一冊、と紹

介している。中高年登山の現況と行方（斎藤惇生）、エベレスト登頂から五十年（江本嘉伸）チベット・ヒマラヤが決める地球の気候（安成哲三）、なぜ人は高地に暮らすか（松林公蔵）、牧畜からみた山の文化（稲村哲也）、山岳観光開発と温暖化（渡辺悌二）、ヒマラヤの環境変動と多発する自然災害（岩田修二）、ブータンの緑を守る政策（月原敏博）など、ヒマラヤ関連の論文も多く収録されている。

（山森）

A 5判 344頁 梅棹忠夫+山本紀夫編

2004年7月8日刊 岩波書店 3,000円+税

ヒマラヤから

パンゴン湖便り

性懲りもなく何度目かのラダックにやってきました。インド人以外が入山するのは初めてのパンゴン山脈の未踏峰の登頂を目指しています。

東西140kmほどあるパンゴン湖は、中央部にインドと中国の国境が通っている重要な国境地帯です。珍しい動物や植物が、周辺の地域や、標高4,400mほどのベースキャンプで見られるのが、登山に加えての楽しみです。9月10日に帰国する予定です。妻の道子も一緒にきています。

今年のラダック方面登山は、登山隊が1～2隊のようです。ストック・カンリにイギリス隊が入ります。パンゴン湖周辺がどうか許可が出たのは政治がらみのようです。明日から山に向かいます。

2004. 8. 10 ラダック、レーにて 沖 允人

■財政支援〔1万円〕東野 良

東京集会のお知らせ

日時 9月27日（月）午後7時～
内容 カンピール・ディオール偵察報告
場所 H A J ルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、J R大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

マナスル入山者

[1952－2002＝51年間]

(注) 派遣母体後ろの()内は登山隊員＋報道隊員等であるが、学術隊員、医師などは登山隊員とした。氏名の×印は、その登山で死亡したもの。

[1] 1952年秋・偵察

日本山岳会(4+1)

隊長：今西錦司(50)／隊員：高木正孝(39)、林一彦(30)、中尾佐助(36)／報道：竹節作太(46)
[翌年の本隊の登路確定のため偵察に入山。その前にアンナプルナIV(7,525m)で高所体験を行い、チュルー(6,200m)に登頂。11月11日BCを北面3,850m地点に設営した。エースの高木がクレバスに転落するハプニングもあったが21日、4,450mにC1を建設し、26日まで偵察活動を行った。]

[2] 1953年春

日本山岳会(13+2)

隊長：三田幸夫(53)／隊員：高木正孝(40)、田口二郎(40)、辰沼広吉(36)、村山雅美(34)、山田二郎(31)、加藤喜一郎(35)、村木潤次郎(30)、山崎英雄(28)、石坂昭二郎(22)、加藤泰安(42)／科学：中尾佐助(37)、川喜田二郎(33)／報道：竹節作太(47)、依田孝喜(36)

[初登頂を目指して4月13日、3,850m地点にBC設営。20日C1(4,600m)、22日C2(5,000m)、28日C3(5,300m)、30日C4(5,600m)、5月8日C5(5,900m)、9日C6(6,100m)、11日C7(6,600m)、15日C8(7,100m)、31日にC9をスノーブレードの7,500mに建設し、加藤喜一郎、山田二郎、石坂昭一郎が入った。三人は翌日、朝七時に頂上アタックのためアンザイレンしてC9を出発した。正午、7,750mに到達したが、時間切れのため登頂を断念した。]

[注] 1954年春 日本山岳会(12+2)

隊長：堀田彌一(45)／隊員：谷口現吉(43)、村山雅美(36)、加藤喜一郎(33)、村木潤次郎(31)、山崎英雄(29)、山田二郎(32)、大塚博美(29)、松田雄一(24)、日下田実(23)、松沢幸雄(26)、辰沼広吉(38)／報道：竹節作太(48)、依田孝喜

(37)

[初登頂を目指して隊を派遣したが、サマ部落手前で地元民の反対にあい、BC入りせずにガネッシュ・ヒマールへ転進したためマナスル登山から除外した。]

[3] 1955年秋・先遣隊

日本山岳会(3)

隊長：小原勝郎(43)／隊員：村山雅美(37)、橋本誠二(37)

[翌年の本隊派遣がスムーズに行くようにサマ部落の確約をとり、10月24日BC建設、C1(4,800m)、C2(5,300m)、C3をナイケ・コル(5,600m)に建設し一週間滞在しアイス・フォールの偵察を行った。]

[4] 1956年春

日本山岳会(12)

隊長：楨有恒(62)／隊員：小原勝郎(44)、今西壽雄(42)、辰沼広吉(40)、依田孝喜(38)、千谷壮之助(39)、加藤喜一郎(35)、村木潤次郎(33)、大塚博美(31)、徳永篤郎(29)、松田雄一(26)、日下田実(25)

[初登頂を目指し入山。3月29日にBC設営。

4月4日C1(5,250m)、14日C2(5,600m)、23日C3(6,200m)、25日C4(6,550m)、5月4日C5(7,200m)、8日C6(7,800m)を建設し、今西とシェルパのギャルツェン・ノルブが入った。二人は8時にC6を出発、12時半、初登頂に成功した。11日、加藤と日下部は7時半にC6を出発し、10時40分登頂に成功した。]

[5] 1971年春

日本マナスル西壁登攀隊(11)

隊長：高橋照(57)／隊員：遠藤登(40)、青木敏(27)、高橋善教(25)、田中壮佑(30)、雨宮節(34)、小原和晴(30)、新隆浩(26)、松崎哲也(30)、田中基喜(21)、清水清二(25)

[西稜の初登攀を目指して入山。3月15日、西面ドメン・コーラにBC(3,500m)設営。21日C1(4,500m)、28日ABC(5,300m)、4月8日C3

(6,500m)、傘岩の攻略を行い28日これの突破に成功。5月6日C4(7,100m)、16日C5(7,390m)を建設し、小原、田中基が入る。二人は翌17日、午前5時10分C5を出発し、午後零時15分登頂に成功し、マナスルの第二登となった。]

[6] 1972年春

韓国隊 (1)

安久一成(29)

[安久が韓国隊に参加したが、4月11日、J A C ルートのC3(6,500m)で雪崩のため、死亡した。]

[7] 1973年春・偵察

同人ユングフラウ (3)

隊長：中世古直子(35)／隊員：鈴木貞子(29)、原田志津(25)

[翌年本隊が予定している東尾根の偵察のため入山。5月7日サマから沢を直登した4,600m地点にBC設営。8日C1(5,200m)、10日東尾根主稜線(5,500m)に到達した。]

[8] 1974年春

同人ユングフラウ (11)

隊長：黒石恒(48)／隊員：中世古直子(36)、関田美智子(34)、内田昌子(33)、森美枝子(32)、板倉昌子(30)、×鈴木貞子(30)、中島睦美(29)、伊藤知子(26)、原田志津(26)、栗林直子(24)、

[東尾根の初登攀を目指して入山。3月3日、4,400m地点にBC設営。入山。10日、5,200m地点にC1、26日C2(6,000m)建設したが、31日、東尾根を断念し J A C ルートへ転進を決定。4月5日新BC(4,350m)設営。8日C1(5,300m)、11日C2(5,900m)、結局6,300m地点をC3とする。28日スノーエプロンの下にC4(7,150m)、5月3日C5(7,650m)を建設し中世古、内田、森、ジャンプーが入る。4日午前8時半に内田とジャンプーがC5を出発し、中世古と森も9時に出発。17時半過ぎ4名は登頂に成功し、中世古、内田、森は女性として世界で初めて八千メートル峰の登頂者となった。5日第二次アタックのためC5に向かった鈴木がプラトー出口(7,550m)付近から滑落行方不明となった。同時にC5に向かった伊藤も意識朦朧の状態にC4側で発見されことなきを得

た。]

[9] 1976年秋

長野県山岳協会 (9)

登攀隊長：田村宣紀(36)／隊員：木村博(34)、島田良(39)、曾我謹昭(34)、清水澄(40)、影山淳(29)、風間毅(29)、清水公男(28)、飯島正直(30)

[イランとの合同登山で通常ルートに入山。9月7日、BC(3,850m)設営。10日、4,920mにC1、19日C2(5,900m)、10月4日、6,400m地点にC3、8日C4(7,150m)、11日、プラトー7,650m地点にC5を建設し、影山、アサデ、ジェルバのパサンが入る。翌日、朝6時にC5を出たが強風で影山の酸素器具が効かなくなりC5へ戻るなどのハプニングもあったが、午後3時43分、3名は登頂に成功した。]

[10] 1978年秋

東京オリンパス登山隊 (3)

隊長：清水清二(32)／隊員：加藤保男(29)、田中壮佑(35)

[少人数での登頂をめざしてHAPを使用して通常ルートに入山。10月7日、アタックしたが強風とプラトーの深雪のため8,000m地点に到達したが登頂を断念した。]

[11] 1981年秋

日本オリンパス登山隊 (4)

隊長：加藤保男(32)／隊員：尾崎隆(28)、富田雅昭(25)、鎌田久美子(25)

[少人数での登頂を目指してHAPを使用して通常ルートに入山。10月1日BC(4,600m)設営。5日C1(5,900m)、10日C2(6,600m)、11日C3(7,150m)建設。12日、加藤と尾崎がプラトーに達したが、尾崎はそのまま登り登頂。14日、加藤と富田も登頂に成功した。]

[12] 1982年冬

日本ヒマラヤ協会 (10)

隊長：山田昇(32)／隊員：菊地薫(36)、新郷信廣(40)、×佐久間隆(32)、角田不二(30)、青田浩(25)、森田雅博(25)、石橋真(30)、村上和也(27)／撮影：阿久津悦夫(46)

[通常ルートから冬期登頂をめざして挑戦。11月30日BC(4,900m)設営。2日、山田がクレバ

スに転落、足首を骨折し離脱。5日C1黒岩上に、11日C2(6,400m)、17日、7,150m地点にC3を建設し、佐久間、角田、青田が入った。翌日、頂上アタックを行ったが、プラトー7,650mで強風のため登頂を断念。下降中佐久間がエプロンから300m滑落死亡した。]

[13] 1985年秋

青森県マナスル登山隊(9)

隊長：対島巖(39)／隊員：国分裕(37)、菊地晶三(41)、工藤一(37)、上原子次男(30)、笹本政昭(35)、西家典雅(25)、増田光男(39)／撮影：菊池哲(68)

[東尾根から挑戦。9月15日BC(4,400m)設営。23日C1(5,300m)、27日C2(5,900m)、10月4日C3(6,300)建設。降雪の為、結局ここが最高到達点となった。]

[14] 1985年秋

イエティ同人(7)

隊長：降旗義道(37)／隊員：高塚武由(42)、小林春好(27)、窪田健治(38)、久保昌之(31)、坂本眞一(29)、内川芳美(25)

[スキー滑降を目的に通常ルートに入山。9月22日にBC設営。10月4日C2(6,400m)、22日、7,200mに到達したが、25日、C2が雪崩に襲われシェルパが1名死亡。装備も紛失したため登頂を断念した。]

[15] 1985年冬

カモシカ同人(2)

隊長：山田昇(35)／隊員：斎藤安平(32)

[冬期アルパイン・スタイル登頂を目指して入山。ヘリコプターでサマに入り、12月5日BC(4,800m)設営。6日5,350m、7日6,100m、8日6,850mの後、アタックしたが強風のため7,200m地点で断念しBCへ降りた。一日休養し、11日6,100m、12日降雪で停滞、13日はエプロンの7,050m、14日、11時40分登頂に成功した。この時、初登頂のJAC隊が岩陰に残したピース缶を発見持ち帰った。7,050mで一泊、翌日BCへ帰着した。]

[16] 1987年秋

青森県山岳連盟(15)

隊長：菊地晶三(42)／隊員：松島静吾(51)、国

分裕(38)、工藤一(38)、×工藤一義(43)、上原子次男(32)、笹本政昭(37)、斎藤周三郎(39)、三上敏子(32)、西谷衛(30)、古川紳二(28)、西家典雅(26)、清川睦夫(27)、戸部洋子(33)、吉田二教(37)

[85年の雪辱戦として東尾根から挑戦。9月26日4,400m地点にBC設営。10月5日稜線にC1(5,430m)、14日C2(5,825m)、17日C3(6,300m)を建設したが、その後豪雪となり撤退、25日再建し、28日6,500mに到達した。しかし、BCに下った工藤一義が意識を失い脳血管障害で死亡した。このため登山を断念した。]

[17] 1988年秋

弘前大学(2)

隊長：堀弘(31)／隊員：黒滝淳二(35)

[通常ルートからの登頂を目指して入山。9月26日にBC(4,200m)設営。10月3日、5,200m地点にC1、13日C2(6,400m)、23日7,200mにC3、翌日堀とサーダーが7,500mまで到達したが体調不良のため登頂を断念した。]

[18] 1989年秋

ヒマラヤ同人(4)

隊長：福島正明(38)／隊員：名塚秀二(34)、鎌田健二(29)、名塚好子(29)

[通常ルートに入山。BC(4,800m)設営。C1(5,600m)、10月2日C2(6,400m)、12日C3を7,300mに建設し、17日、7,400mに到達したが、強風のため登山を断念した。]

[19] 1995年秋

カトマンズクラブ(9)

隊長：金沢健(49)／隊員：大西保(53)、三谷統一郎(39)、木本哲(39)、堀弘(36)、金沢明子、谷口守(45)、塩田純一(44)、黒滝淳二(42)

[通常ルートに入山。9月19日BC(4,800m)設営。22日C1(5,800m)、28日C2(6,500m)、10月9日(7,150m)建設。12日、谷口、木本、堀が第一次アタックするも悪天のため7,450mで断念。16日、三谷、HAP2名が7,450m地点で降雪のため断念。17日、木本、堀がC2まで達したところで登山を断念した。]

[20] 1996年秋

同人ラ・ネイジュ(6)

隊長：宮下岳夫(39)／隊員：大泉剛(37)、大波久男(41)、星和明(37)、石川健太郎(23)、佐々木大輔(19)

[スキー滑降を目指して通常ルートに入山。9月9日BC(4,700m)設営。11日ABC(5,400m)、17日C1、22日C2(6,450m)、27日C3(6,900m)、10月12日C4(7,700m)建設。13日断念。7,400mからBCまでスキー滑降。]

[21] 1996年秋

登稜会(6)

隊長：石井清(47)／隊員：三村雅彦(31)、杉山敏康(27)、有川博章(27)、石川富康(59)、×小西政継(57)

[通常ルートに入山。9月27日、石川とHAPが登頂。28日、杉山とHAP2名が登頂。30日、小西が17時半登頂し、18時40分三村と有川が登頂。三村と有川が下降すると小西が疲労しており、一緒に下降したがはぐれ、翌日小西は行方不明となった。]

[22] 1997年秋

明治大学(8)

隊長：三谷統一郎(41)／隊員：山本篤(34)、原田暁之(31)、廣瀬学(30)、高橋和弘(23)、豊嶋匡明(22)、加藤慶信(21)、関裕一(22)

[通常ルートに入山。9月5日BC(5,000m)設営。14日C1(5,800m)、19日C2(6,350m)、23日C3(6,900m)、10月6日C4(7,500m)建設。8日、三谷、山本、高橋、豊嶋、加藤とサーダーが登頂。翌日、原田、廣瀬、関とHAP2名が登頂に成功した。]

[23] 1997年秋

鈴鹿アルパインクラブ(6)

隊長：中村金夫(46)／隊員：中嶋善範(42)、水谷晃(39)、熱田渉(30)、加田省吾(29)、分部竜彦(21)

[東尾根に挑戦。10月12日6,300mに到達したが雪崩の危険があり登山を断念した。]

[24] 1997年秋

ガイアアルパインクラブ(2)

隊長：小西浩文(34)、山本正嘉(39)

[通常ルートへ入山。隊長が7,700mに到達したが登頂を断念した。]

[25] 1998年秋

秋田海外登山研究会(8)

隊長：丸山芳雄(59)／隊員：小野寺光義(52)、鈴木正典(36)、田中敏雄(42)、小林重一(43)、藤川勝人(32)、桶川和気夫(48)、鈴木勝仁(29)、[通常ルートに入山。7,200mまでで断念。]

[26] 1998年秋

日本登攀クラブ(2)

隊長：山野井泰史(33)／隊員：山野井妙子(42)、[北西壁に挑戦したが、9月15日、下部で雪崩に遭い泰史が埋まったが妙子が救出。登山を断念した。]

[27] 1999年冬

札幌山岳連盟(7)

隊長：江崎幸一(47)／隊員：工藤寛(33)、阿波徹(37)、井上剛(34)、井嶋健一(36)、高橋留智亜(34)、大坂卓也(38)

[冬期登頂を目指して通常ルートに入山。BC(4,700m)、ABC(5,400m)、C1(6,100m)、C2(6,800m)を建設したが、-40度と激しいジェット気流のため、12月18日、7,300mで登頂を断念した。]

[28] 1999年冬

群馬県山岳連盟(7)

隊長：名塚秀二(45)／隊員：佐藤光由(38)、後藤文明(34)、品川幸彦(31)、颯持典之(30)、福本誠志(25)、田島崇行(22)

[冬期登頂を目指して通常ルートに入山。12月16日BC(4,700m)設営。1月1日、5,600m地点にC1、3日C2(6,250m)建設。9日～15日降雪のため停滞。結局、7,100mに到達したのみで1月22日登山を断念した。]

[29] 2001年秋

日本勤労者山岳連盟(6)

隊長：近藤和美(59)／隊員：倉橋秀都(41)、上野幸人(47)、×栗原功(42)、齊藤明(40)、大久保由美子(32)

[通常ルートに入山。9月15日ヘリコプターで入山しBC(4,900m)設営。23日5,800m地点にC1、29日C2(6,700m)、10月8日7,500m地点にC3建設し、倉橋、齊藤、大久保とHAP3名が入る。翌日6名が登頂成功。第二次隊の近藤、

上野、栗原とHAPはC3で停滞し強風のため12日、登頂を断念し下降中、栗原が不調となり近藤と7,000m地点でビバーク。13日午後2時40分、6,600m地点で死亡した。]

[30] 2002年春

小西EXP(1)

隊長：小西浩文(35)

[通常ルートにHAPと入山。雪崩に襲われ負傷し、7,600mで登頂を断念した。]

20世紀日本人マナスル登頂者リスト

	氏名	生年月日	登頂年月日	年令
1	×今西 壽雄	1914. 9 .	1956. 5 . 9	41★
2	×加藤喜一郎	1920.11.	1956. 5 .11	35
3	日下 部実	1930. 6 .	1956. 5 .11	25
4	小原 和晴	1940. 4 .	1971. 5 .17	31■
5	田中 基喜	1948. 7 .	1971. 5 .17	22■
6	f 中世古直子	1937.12.	1974. 5 . 4	36☆
7	f 内田 昌子	1941. 1 .	1974. 5 . 4	33☆
8	f 森美 枝子	1941. 5 .	1974. 5 . 4	32☆
9	影山 淳	1947. 4 .	1976.10.12	29
10	尾崎 隆	1952. 9 .	1981.10.12	29

	氏名	生年月日	登頂年月日	年令
11	×加藤 保男	1949. 3 .	1981.10.14	32
12	富田 雅昭	1956. 6 .	1981.10.14	25
13	×山田 昇	1950. 2 .	1985.12.14	35◆
14	×斎藤 安平	1953. 1 .	1985.12.14	32◆
15	石川 富康	1936.11.	1996. 9 .27	59
16	杉山 敏康	1968. 2 .	1996. 9 .28	28
17	×小西 政継	1938.11.	1996. 9 .30	57↓
18	三村 雅彦	1964. 5 .	1996. 9 .30	32
19	有川 博章	1968.11.	1996. 9 .30	27
20	豊嶋 匡明	1974. 8 .	1997.10. 8	23
21	高橋 和弘	1973.10.	1997.10. 8	23
22	加藤 慶信	1976. 1 .	1997.10. 8	21
23	三谷統一郎	1958. 3 .	1997.10. 8	39
24	山本 篤	1962.10.	1997.10. 8	35
25	原田 暁之	1965. 8 .	1997.10. 9	32
26	廣瀬 学	1967. 3 .	1997.10. 9	30
27	関 裕一	1975. 7 .	1997.10. 9	22
28	倉橋 秀都	1960. 2 .	2001.10. 9	41
29	齊藤 明	1961. 7 .	2001.10. 9	40
30	f 大久保由美子	1968.12.	2001.10. 9	32

(注) ★は初登頂。■は初登攀。☆は女性世界初八千メートル峰登頂。◆は冬期。

↓は登頂後下山中死亡。

[写真：OVER THE HIMALAYA 大森弘一郎より]



吉尾弘(YOSHIO Hiroshi)

1937. 4. 14~2000. 3. 20 東京都墨田区生れ。1953年、都立墨田高校定時制に進学、秋に山岳部に入り登山を始めた。55年東京朝霧山岳会入会。56年9月、原田輝一と谷川岳一ノ倉沢滝沢下部登攀。57年3月、同本谷を原田と積雪期初登攀。58年1月、北岳バットレス中央稜を奥山章、小板橋徹、芳野満彦、甘利二郎と積雪期初登攀。第二次RCCの創立同人となる。58年3月、剣岳チンネ中央チムニー、Cクラック積雪期初登攀。7月、前穂高岳屏風岩中央カンテ岩溝ルートを山口要と開拓し、12月同ルートを芳野満彦、小板橋徹と積雪期初登攀。59年3月、剣岳池ノ谷右奥壁ドーム稜を小森康行、服部清次と積雪期初登攀。3月、東京朝霧山岳会退会。9月、アッセントクラブ創立に参画。60年1月、篠原隆夫と前穂高北尾根IV峰北条・新村ルート登攀後、屏風岩中央カンテを下降。61年結婚。62年1月、前穂高岳屏風岩東壁雲稜～東壁右岩稜～同Dフェイスを篠原隆夫、林与四郎と連続登攀。63年3月、鹿島槍ヶ岳北壁中央ルンゼを篠原隆夫、林与四郎と積雪期初登攀。12月、東京都勤労者山岳会入会。65年(夏)ヨーロッパ・アルプスに全日本合同隊の隊長として渡航し、湯浅道男、佐々木徹、加藤滝男とヴェッターホルン北壁、湯浅とドリュ北壁登攀。66年3月、日本勤労者山岳連盟(労山)副会長就任。69年1月、前穂高屏風岩中央壁J E C Cルート積雪期初登攀。3月、労山理事長就任。72年3月、同会長就任。78年(春)労山がネパール、ガネッシュ・ヒマールIV [パビール(7,102m)] にネパール警察と合同で派遣した登山隊(隊長ら15名)を率いて、初登頂を目指して入山。南東壁にルートを設定、10月20日、ネパール側4名、吉尾を含む日本側9名が初登頂に成功した。81年(春)労山初の八千メートル峰挑戦となったチョー・オユー(8,201m)のネパールとの合同登山隊(小松猛隊長ら29名)副隊長として参加。東壁から南稜に転進したが5月21日、7,120mに到達したが登頂を断念した。83年(秋)U-TANクラブがダウラギリI (8,167m)に派遣した登山隊(長谷川恒男隊長ら14名)の副隊長として参加

したが、吉尾は体調を崩して下山した。隊は7,500mに到達したものの強風のため断念した。87年(夏)グランド・ジョラス北壁ウォーカー稜登攀。96年、再び労山会長に就任。2000年3月3日、谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジ登攀中に滑落死亡。遺体は収容された。十代から遭難死亡するまで生涯登攀生活を実践した日本登山史上稀有なクライマー。多くの岳人に影響を与えたのみならず、労山の精神的支柱としての役割を担い、労山の現在の進展に大きく寄与した。著書に「垂直に挑む男」(S38年)、「岩登りの魅力」(1978年)「垂直に挑む男(中央公論文庫)」(1980)、評伝に「クライマー」(1999年)、遺稿集に「垂直の星」(2001年)がある。

柳沢幸弘(YANAGISAWA Yukihiro)

1955. 2. 8~1982. 8. 15 長野県埴科群坂城町生れ。1971年県立上田東高校2年で山岳部に入り登山を開始、ハヶ岳や北アルプスを登る。75年早稲田大学岳友会入会。谷川岳、北アルプス、ハヶ岳などを中心に岩登りに傾注。78年ペルーアンデスに隊長として遠征、6月、パトロン(5,273m)、7月、ワスカラン南峰(6,768m)、北峰(6,655m)などに登頂し、翌年1月、アコンカグア登頂。79年登攀クラブ蒼氷に入会し、12月、戸田暁人と奥鐘山西壁高知ルート冬期初登攀～京都ルート。80年1月、戸田と谷川岳一ノ倉沢衝立岩本庄山の会ルート冬期初登攀。(夏)ヨーロッパへ渡航。マッターホルン、ヘルンリ稜から4回登頂。ミディ南壁、プレチュール西壁などを登攀。81年(秋)イエティ同人がアンナプルナI (8,091m)南壁の新ルート開拓を目指した登山隊(吉野寛隊長ら12名)に参加、10月29日、青田浩と初登攀に成功したが、31日、加藤康二と遠藤晴行が第二次アタックを行い、登頂を断念して下降中、8,000m付近で加藤が転落行方不明となった。82年(夏)日本山岳協会がチョゴリ(K2 8,611m)北稜から無酸素・初登攀を目指して派遣した登山隊(新貝勲隊長ら49名)に参加。8月14日、第一次隊として坂下直枝、吉野寛と初登攀に成功した。しかし、帰路、8,350m付近で坂下と共にビバークとなり、翌日衰弱が激しくなったため、坂下は下降し50m上でビバークした吉野が付き添い、第二次隊

から物資の補給を受け、吉野が付き添って19時、8,000m地点の固定ロープに着いた。アンザイレンを解いた柳沢はデボしたハーネスをとりに行ったら転落死亡した。登攀の世界でアルパイン・スタイルを追求し、次代を担う逸材と期待されていた矢先の遭難であった。遺稿追悼集に「天の匂い」(S59年)がある。

菅野一寛(SUGENO Kazushige)

1949.4.15~1980.2.11 福島県安達郡東和町生れ。1965年、県立福島工業高校に入学、山岳部に入り登山を始める。東北の山々で経験を積む。67年、吾妻山のインターハイ、県体に出場。社会人となつてからはハヶ岳、谷川岳で岩登りの経験を積む。78年(春)雪と岩の会がネパール、ヒマルチュリ(7,893m)に派遣した登山隊(尾形好雄隊長ら10名)に参加。5月6日、藤倉和美、宮崎久夫、田村成典が南西稜から主峰の初登攀に成功した後、7日、尾形と共に西峰(7,540m)の初登頂に成功した。80年、雪と岩の会入会。2月11日戸隠岳で雪庇を踏み抜き転落死亡した。遺稿追悼集に「雪と岩—故菅野一寛君追悼集—」(S56年)がある。

寺本政幸(TERAMOTO Masayuki)

1950.11.30~1981.9.28 愛知県名古屋市長穂区生

れ。県立東山高校定時制在学中から登山に親しむ。卒業後は「ちんぐるま山の会」に在籍し、中央、南、北アルプスで登山経験を積む。78年(夏)H A Jがインド、ヌン(7,135m)に派遣した登山隊(沖允人隊長ら9名)に参加。8月22日、第二次隊として飯村富彦、H A Pと登頂に成功した。81年(秋)H A Jがインド、ナンダ・カート(6,611m)に派遣した登山隊(小島守夫隊長ら8名)に参加。9月28日、第二キャンプ(6,000m)が雪崩に襲われ、藤倉ら6名の仲間と共に行方不明となり、その後の捜索隊の派遣でも発見されなかった。遺稿追悼集に「山に懷かれて」(1982年)がある。

岡正範(OKA Masanori) 1948.7.29~1979.8.6 新潟県東頸城郡安塚町生れ。1968年、弘前大学に入学し、山岳部に入り登山を始める。東北の山々、劔岳、北海道・日高などで登山経験を積む。79年(夏)弘前大学がカラコルム、テラム・カンリⅢ(7,382m)に派遣した登山隊(花田澄人隊長ら12名)に参加。8月4日、工藤光隆、岡正範、黒滝淳二の3名が初登頂に成功した。しかし、下山途中の6日、岡はC1からBCの途中のスノーブリッジを踏み外し激流に落ち死亡。翌日氷河湖々底にて発見された。登山報告書「テラム・カンリⅢ」(1982年)に遺稿追悼がある。

■ 寸 感 ■

昨年までの52年間で、ヒマラヤの6千メートル以上の峰で死亡した岳人は265名だ。その方々の「遺稿追悼集」を知りたい。所蔵のものについて①書名(副題)、②編者、③発行年月日、④発行者、⑤判型、⑥頁数、⑦死亡者名をご教示戴ければ幸甚であります。(山森)

事務局日誌(8月)

- 2日(月) 故・野沢井歩一周忌出席者リストを野沢井家へ送付
9日(月) パスーBC訪問団(酒井國光団長ら4名)出発(PK)
11日(水) ヒマラヤ394号発送

- 15日(日) 7月6日~8月14日 40日間連続した真夏日(30度以上)途切れる。
23日(月) パスーBC訪問団帰国(PK)
24日(火) 野沢井歩一周忌追加リスト送付
30日(月) 東京集会(18名)

ヒマラヤ No.395 (10月号)

平成16年9月10日印刷 16年10月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料) をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局
中日新聞東京本社

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中ビル6F
[TEL] 03-3595-4830 (代) [FAX] 03-3595-4831
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/>

※定価額に消費税も含まれています。

最新クライミング技術

菊地 敏之 著

ベシック・フリークライミング

菊地 敏之 著

山小屋の主人の炉端話

工藤 隆雄 著

チャレンジ！アルパインクライミング

【北アルプス編】
廣川 健太郎 著

チャレンジ！アルパインクライミング

【南アルプス・ハク岳・谷川岳編】
廣川 健太郎 著

すぐ役立つ 山のメモ帖

岳人編集部 編

中高年の雪山入門

福島 正明 著

すぐ役立つ 新・山の雑学ノート・第1集

岳人編集部 編

女性ガイドのしなやか登山術

樋口 英子 著

登山の運動生理学百科

山本 正嘉 著

山書散策

河村 正之 著

フリークライミングからマルシェまで、アルパイン・バックパッカーまで、この「山岳書」の技術は、単なる「マニュアル」ではなく、その意図や選択基準までを解説。

新しい生計手段としてあつた登山に、歴史的な人々の「フリークライミング」を「ムフ」の作り方、ロープワーク、自然壁の登り方、スキルアップのしかたや取り組む方など必要不可欠な多岐にわたる「登山」のノウハウが、この「山岳書」に解説。ジムから始める「アウトドア」を目指す、すべてのクライマーのための教則本の決定版。

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者へ「炉端で語る」人話の取って置きのお話。

北アルプス全峰を代表する「ルート」を、分かりやすく「カラー」写真で解説した「ルート案内書」。夏の岩壁・雪稜の「パノラマ」に、この「山岳書」を加えて、冬期岩壁・雪稜・ルンゼ登山を絶叫。

上巻の「アルプス」編に続いて「南アルプス・ハク岳・谷川岳」などから日本を代表する「アルパイン・クライミング」の「ルート」を、写真を豊富に使用して、わかりやすく解説した「ルートガイド」の決定版。

登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を提供。

低山から夢のヒマラヤまで、トランシルバニアを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しむ。

山での話聞かされた山の数々には、つまらない、豊かな雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。

常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば、山はもっと楽しくなると呼びかける。女性登山ガイドの「ユニークな登山講座」。

「どうしてこんなに安全な登山ができるのか」と、ヒマラヤなど高山登山実感を踏まえて、分かりやすくまとめた。

今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいのか。そんな時の指針として——「山岳」連載時から好評。

1,575円 2,100円 1,575円 1,470円 1,680円 1,470円 2,625円 2,625円 1,575円 1,785円 1,680円

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

ICI本店	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3208-6601	新潟とやの店	〒950-0982	新潟県新潟市堀之内南1-16-52	025-241-5134
新宿西口店	〒160-0023	東京都新宿区西新宿1-16-7	03-3346-0301	仙台店	〒983-0852	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8	022-297-2442
神田登山店	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F)	03-3295-0622	秋田広小路店	〒010-0001	秋田県秋田市中通1-4-5	018-884-1771
神田本館	〒101-0051	東京都千代田区神田小川町3-10	03-3295-3215	盛岡大通店	〒020-0022	岩手県盛岡市大通1-10-16	019-626-2122
八王子店	〒192-0081	東京都八王子市横山町3-12	0426-46-5211	札幌店	〒060-0062	北海道札幌市中央区南二条西4-8	011-222-3535
大宮店	〒330-0802	埼玉県さいたま市大宮区宮町1-37	048-641-5707	北十二条店	〒001-0012	北海道札幌市北区北十二条西3-5	011-747-3062
高崎店	〒370-0831	群馬県高崎市新町5-3	027-327-2397	伏古店	〒007-0861	北海道札幌市東区伏古一条4-1-45	011-787-0233
川越店	〒350-0045	埼玉県川越市南通町14-4	0492-26-6751	大坂ミナミ店	〒556-0005	大阪府大阪市浪速区日本橋4-9-17	06-6636-2470
甲府店	〒400-0814	山梨県甲府市上阿原町481-1	055-221-0141	神戸三宮店	〒650-0021	兵庫県神戸市中央区三宮町1-3-10	078-335-0355
宇都宮今泉店	〒321-0962	栃木県宇都宮市今泉町1560	028-639-9650	外商部(メールオーダー係)	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3200-7219
太田高林店	〒373-0825	群馬県太田市高林東町1386	0276-38-0620				
松本店	〒390-0874	長野県松本市大手3-4-24	0263-36-3039				
長野店	〒380-0825	長野県長野市末広町1356	026-229-7739				
茅野駅前店	〒391-0001	長野県茅野市茅野3502-1	0266-82-8510				
新潟店	〒950-0087	新潟県新潟市東大通2-5-1	025-243-6330				



ICI 石井スポーツ